

同語反復文の意味はどのように解釈されるか[†]

佐山 公一・阿部 純一

小樽商科大学

北海道大学

Interpretation of nominal tautology

Kohichi SAYAMA and Jun-ichi ABE

Otaru University of Commerce Hokkaido University

Although a tautological sentence, such as "Business is business," "*kodomo* (children) *wa* (are) *kodomo* (children) *dearu*," does not carry literal information, it normally conveys some meaning. We propose that Japanese tautology is interpreted by applying one or more "principles." One of the principles causes the listener to recognize the existence of the (good or bad) evaluation for the referent of the repeated word in a sentence such as "*daiya* (diamond) *wa* (is) *daiya* (diamond) *dearu*."

Comparing Japanese tautologies with English tautologies, led to the conclusion that Japanese tautologies are interpreted more context-dependently than English ones, and that tautology has some universal meanings as follows: (1) existence of salient features (especially values) of a noun phrase "A" in "A *wa* A *dearu*," (2) the originality of "A" with respect to other categories or another noun phrase "B" in "B *wa* B, A *wa* A *dearu*," i. e., "A is original and different from other categories (or B)," (3) sameness as a member of category "A," i. e., "All As are not different from other As."

Key words: cognitive processes, psycholinguistics, reading comprehension, sentence comprehension, figurative language, tautology

キーワード: 認知過程, 言語理解, 言語知識, 文脈・状況知識, 修辞, 同語反復文

いわゆる同語反復文 (nominal tautology) はほとんどすべての言語に認められる言語表現である (Gibbs & McCarrell, 1990; Wierzbicka, 1987)。たとえば, 日本語では (1) のような表現を, また, 英語では (2) のような表現をしばしば聞いたり読んだりするところであろう。

(1) (しよせん,) 子供は子供だ。

(2) Business is business.

同語反復文は文字通りの意味 (literal meaning) では新しい情報を何も運ばない。にもかかわらず, この文が普遍的と言えるほどに存在する

のはなぜであろうか。そもそも同語反復文という表現形式はコミュニケーションの中で実際にどのような役割を果たし, どういった種類の情報を伝えているのであろうか。

本稿では, (3) の文形式をとる日本語の同語反復文, および (4) の形式をもつ英語の同語反復文がどのように解釈されるかを考察する。

(3) A は A である (または, A は A だ)。

(A: 名詞)

(4) (ART) A be (ART) A.

(A: 名詞; ART: 定冠詞, 不定冠詞, または無冠詞)

[†] 本研究は, 平成5年度および平成6年度の文部省科学研究費 (重点領域研究「音声対話」(計画班B), 課題番号05241102) の補助を受けた。

以下では, まず, 第1節において, 同語反復文の意味解釈に関わる研究が, いわゆる“文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ表現の産出・理解に

関する研究の中に位置づけられるものであることを述べる。続いて、第2節から本題に入り、同語反復文の意味解釈について何が問題となるのかを、日本語と英語の文例を挙げつつ説明する。第3節では、同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を、英語の場合と日本語の場合のそれぞれについて展望する。第4節では、日本語と英語の同語反復文の比較を行う。とくに、日本語に関する我々の説明と英語に関する Wierzbicka (1987) の説明について具体的な比較を行い、同語反復文の意味解釈の文脈独立性について考察する。最後の第5節では、結論として、同語反復文の意味解釈の有する個々の言語を超えた普遍性に言及する。

なお、本稿の以下では、同語反復文中で繰り返される名詞、すなわち(3)、(4)で言うAを“反復語”と呼ぶことにする。

1. “文字通りの意味”を超えた意味を運ぶ表現としての同語反復文

Grice (1975, 1978) が“会話の公準 (conversational maxims)”¹⁾ を提案して以来、それを基本

1) 会話の公準とは、コミュニケーションにおいて話し手または書き手は、聞き手または読み手に対して協力的であるはずだという暗黙の前提を明示的に体系化したものであり、その内容は、以下のように、量、質、関連性、様式の4つのカテゴリーに分けられている。

量：

1. 会話へのあなたの貢献を、(やりとりのその時点での諸目的のために)必要とされているだけの情報量があるようにせよ。
2. 会話へのあなたの貢献を、必要とされている以上に情報量のあるものにしてはいけない。

質：会話へのあなたの貢献を、真実であるところのものにしようせよ。

1. あなたが虚偽であると信じていることを言っははいけない。
2. あなたが適切な証拠をもっていないことを言っははいけない。

関連性：関連性があるようにせよ。

様式：はっきりと表現せよ。

1. 表現の不明瞭さを避けよ。
2. 多義性を避けよ。
3. 簡潔であれ(不必要な冗漫さを避けよ)。
4. 順序正しくせよ。

的な理論的枠組みに据え、文字通りの意味を超えた意味を運ぶ多様な表現を、会話の公準の下位原則に違反する表現として位置づけようとする様々な試みが行われてきている(たとえば、Brown & Levinson, 1978; Levinson, 1983; Sperber & Wilson, 1986; 山梨, 1986 など)。そうした試みは、“修辭的 (figurative)”な表現や“間接的 (indirect)”な表現などを包括的に把握し、それらに共通する意味解釈の過程を探って行こうとするアプローチと言える。それらの研究はいずれも、“同語反復文”の使用を、“緩叙法 (litotes)”, “誇張 (hyperbole)”などととも、会話の公準の下位原則に違反する代表的な例として捉えている。つまり、そうした研究では、いずれも、同語反復文を、文字通りの意味では何ら新しい情報を伝えない発話とみなしているわけである。また、こうした試みとは別に、“隠喩 (metaphor)”, “アイロニー (irony)”などと呼ばれる表現、あるいはいわゆる“間接的発話行為 (indirect speech act)”として機能する表現、等々の理解過程をそれぞれ個別的に扱う研究も盛んに行われるようになってきている。多種多様に存在するそうした研究の中には、たとえば、隠喩の理解に関する Gildea and Glucksberg (1983), Glucksberg and Keysar (1990), Ortony (1979), Ortony, Schallert, Reynolds, and Antos (1978) などの研究、アイロニーの理解に関する Clark and Gerrig (1984), Jorgensen, Miller, and Sperber (1984), Kreuz and Glucksberg (1989), Sperber (1984) などの研究、また、間接的発話行為の理解に関する Gibbs (1982, 1983, 1984, 1986) の研究、等々が含まれる。そのような状況の中で、近年、“同語反復文”の理解に関してもいくつかの考察が行われるようになってきている。本研究では、同語反復文の理解に関するそうした研究の現状を展望しつつ、そこでの議論に考察を加えることを本題とする。

2. 同語反復文の容認可能性

前述したように、同語反復文は、文字通りの意味では新しい情報を何も伝えない。しかしながら、同語反復文は、日常の言語活動の中で十分に意味のある発話として産出されたり理解されたりして

いる。では、どのような場合に、同語反復文は意味ある発話として容認 (accept) されるのだろうか？

文脈から離され、同語反復文1文のみが与えられた場合を想定してみよう。そして、そうした場合、同語反復文のみからどの程度明確な意味を受けとることができるのかを考えてみよう。

- (5) a. ゴミはゴミだ。
b. ?空は空だ。

- (6) a. A diamond is a diamond.
(Gibbs & McCarrell, 1990 より)
b. ? A bottle is a bottle.
(Fraser, 1988 より)

一般に、日本語を母語とする聴者ならば (5 b) よりも (5 a) の文意の方を解釈しやすいと感じ、また、英語を母語とする聴者ならば (6 b) よりも (6 a) の方を解釈しやすいと思うであろう (なお、本稿では、問題の文例が母語話者に理解されにくいと思われる場合、“?” の印をその文例の頭に付けて示すことにする)。

(5 a) や (5 b) の例、あるいは (6 a) や (6 b) の例は、いずれも、(7) や (8) のような、慣習化 (conventionalize) された言いまわしとは異なる。

- (7) (腐っても,) 鯛は鯛(だ)。

- (8) Boys will be boys.

また、(5 a), (5 b) も (6 a), (6 b) も、ともに文としての表現形式は同じである。したがって、(5 a) と (5 b) の間、および (6 a) と (6 b) の間の解釈しやすさの違いは、反復語の何らかの違いから生じると考えるのが妥当であろう。つまり、聴者は、「ゴミ」、「diamond」といった名詞から構成される同語反復文に対しては、解釈を促す特定の文脈やその場の状況を与えられなくとも、比較的明確な意味を引き出すことができる、ということである。

しかしながら、どのような反復語の同語反復文でも、それが置かれた個々の文脈・状況に依存せ

ずに、特定の固定的な意味を受けとることができる、というわけではなさそうである。(9 a), (9 b) の例を見てほしい。

- (9) a. いくら小さくても、ダイヤはダイヤだ。十分に価値がある。
b. いくら高価だといっても、ダイヤはダイヤだ。命にはかえられない。

我々は、同一の同語反復文「ダイヤはダイヤだ」を、互いに異なった意味をもつものとして受けとる。その解釈の差は (9 a) と (9 b) の文脈の違いからもたらされると言える。

(5), (6) の例および (9) の例は、同語反復文の意味解釈の二つの異なる側面を示している。すなわち、(5), (6) の例から分かるように、たとえ文脈・状況から切り離されたとしても、ある種の同語反復文は明瞭な意味をもつものとして解釈されうるということであり、また、(9) の例に見られるように、同一の同語反復文であっても、文脈・状況が変わると異なる意味に受けとられる場合もある (佐山・阿部, 1988 a, 1988 b, 1991 a, 1991 b, 1994), ということである。

3. 同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

3.1 英語の同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

これまで、英語では、(4) の形式をもつ同語反復文の意味解釈のあり方について、ある程度の言語学的考察や心理学的考察がなされてきている (Fraser, 1988; Gibbs & McCarrell, 1990; Glucksberg & Keysar, 1990; Levinson, 1983; Ward & Hirschberg, 1991; Wierzbicka, 1987, 1988)。そうした考察は、前節の終わりで指摘した同語反復文の意味解釈をどのように説明しているであろうか？ 以下、その点を中心にして過去の主な研究の内容を述べていくことにする。

3.1.1 Levinson (1983) の研究 Levinson (1983) は、その著書『語用論 (pragmatics)』において、文字通りの意味を超えた意味が推論される基本的な原理を議論しており、その中で同語反復文の場合にも触れている。彼は、聴者が、会話の公準を基盤とする言語普遍的 (language-

universal) な推論の原理を数多く有しており、そうした原理の一部を、言語表現それ自体とは関係なく文脈・状況に依存して選択し、個々の言語表現に適用すると主張する。

同語反復文の場合について具体的に言えば、聴者は次のように解釈するという。まず、同語反復文を、“ $\forall x(W(x) \rightarrow W(x))$ ” という論理形式で表される恒真命題を自然言語によって表現したものとみなす。そして、それが、文字通りの意味では、何も新しい情報を伝えておらず、量の公準に違反していることに気づく。聴者は、そうした違反が見かけに過ぎず、実際には会話が協力的に行われているはずであると考え。そして、たとえば同語反復文 (10) に対しては、同語反復文が発話されるようなすべての文脈・状況に共通にあてはまる推論の原理を使い、「ひどい状況は戦争では常に起こる。それは戦争の性質であり、その特別な災難を嘆いてもためにならない」とでも表現できるような一般的な意味を推論する。さらには、実際に (10) が発せられる個々の文脈・状況それぞれに適合する推論の原理を用い、文脈・状況ごとに変わる個別的意味を付加的に推論する。

(10) War is war.

要するに、Levinson の同語反復文の意味解釈に関する主張は、聴者が同語反復文に対して適用する推論の原理が、おしなべて文脈・状況に依存して選択される、つまり、同語反復文の意味が基本的に文脈・状況依存的に決まる、ということである。

3.1.2 Wierzbicka (1987) の研究 Wierzbicka (1987) は、同語反復文の意味が文脈・状況に強く依存して決まるとする Levinson (1983) の考えに反対する。彼女は、特定の文脈・状況によらず、一般的な言語知識さらには同語反復文に特有の表層表現に関する知識 (冠詞の有無と種類および反復語の単数・複数に関する知識) を参照するだけでほぼ同語反復文を解釈できると主張する。Wierzbicka は、言語知識の範囲内に、あらゆる同語反復文に共通して適用される慣習化された知識があると考え。彼女は、そうした知識が単語の意味的知識とは異なるが、単語の知識と同様に“意味的不変体 (semantic invariant)” であると

見なす。彼女によれば、同語反復文を解釈する際、通常聴者は [A], [B] 二つの意味的不変体を参照し、利用するという。

[A] An A is not different from other A's.
(All A's are the same.)
(ある A は他の A と違わない。[すべての A は同じである。])

[B] This cannot change.
(これは変わらない。)

また、彼女によれば、(11), (12) のように反復語が“ユニークな対象 (unique entities)” を指示する同語反復文の場合には、聴者は知識 [C] を援用するという。

(11) East is east.

(12) Samantha is Samantha, and you are you.

[C] This cannot be denied. (Nobody could say that this is not true.)
(これを否定することはできない。[誰もこれが真実でないとはいえないであろう。])

こうした、あらゆる同語反復文に適用できる言語知識に加え、Wierzbicka (1987) は、一部の同語反復文のみに適用される言語知識もあると指摘する。彼女によれば、英語の同語反復文には、冠詞の有無、反復語の単数・複数の違い、および、反復語が何らかの特別な意味的カテゴリーに属するか否かによってマーク (mark) されるいくつかのパターンがあり、それらのパターンごとに慣習化された一定の言語知識が記憶から引き出されるという。それゆえ、Wierzbicka の考えに従えば、人はそうした微妙な表現形式上の違いをも手がかりとしながら同語反復文を解釈していることになる。彼女はそうした英語同語反復文のパターンを“下位構文 (subconstruction)” と呼ぶ。そして、英語を母語とする聴者は少なくとも 3 種の下位構文 (の知識) を保持していると指摘し、

それぞれ“複雑な人間の行為に対するさめた態度 (sober attitude toward complex human activities)”の同語反復文, “人間の性質に対する寛容 (tolerance for human nature)”の同語反復文, “義務 (obligation)”の同語反復文と名づけている²⁾。

“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の同語反復文:

反復語が, 単数形をとり, かつ無冠詞で用いられ, かつ相互作用を伴う複雑な人間の行為を表わす。

Wierzbicka (1987) は, この下位構文にあてはまる同語反復文の例として, (13) [(10) と同じ], (14) [(2) に同じ], (15)などを挙げている。

(13) War is war.

(14) Business is business.

(15) Politics is politics.

Wierzbickaによれば, この下位構文にあてはまる同語反復文がもつ反復語によって指示される対象は, 特殊な状況での行為あるいは別の世界で起こる出来事であり, そうした行為は大目に見なければならず, また避けることのできない否定的側面をもつ, という。そして, この下位構文にあてはまる同語反復文から, 聴者は, そのような複雑な人間の行為に対し“さめた態度”で接する必要がある, といったニュアンスを推論するとしている。

“人間の性質に対する寛容”の同語反復文:

反復語が, 複数形をとり, かつ無冠詞で用いられ, かつ人間を表わす。

2) Wierzbicka (1987) は, 紙面の都合で取り上げることができないと断りながら, これら三つ以外にも下位構文があるとはのめかしている。ただ, Wierzbicka (1987) はもちろん, その後の彼女の論文の中にも, それに言及した記述はないようである。

この下位構文にあてはまる同語反復文としては, (16), (17), (18)などが挙げられている。

(16) Boys are boys.

(17) Kids are kids.

(18) Women are women.

彼女によれば, この下位構文に適合する同語反復文は, 人はある種の人間の行動に対しては寛容である必要がある, といったニュアンスで解釈される, という。つまり, 「boy」, 「kid」, 「woman」といった類の人間は他の人々がそうすべきだと思いうやり方でものごとを行うことができないのだ, とでもいうようなニュアンスが導き出されるという。加えて, 彼女によれば, この下位構文には, (19) ((8) と同じ) のように, 習性を表す助動詞「will」をつけて発話される場合が含まれるという。

(19) Boys will be boys.

Wierzbickaは, “複雑な人間の行為に対するさめた態度”の下位構文にあてはまる同語反復文から引き出される意味と, “人間の性質に対する寛容”の下位構文にあてはまる同語反復文から導き出される意味とは, 互いに類似しているが, 以下の点で異なると説明している。すなわち, 前者の意味には反復語の“悪い (bad)”側面が含まれるが, 後者の意味にはそれが無い。たとえば, 同語反復文 (15) から聴者は, 政治が“汚い仕事”であるというニュアンスを推論するが, (16), (17), (18)をそれと類似した意味合いで理解することはない, とのことである。

“義務”の同語反復文:

反復語が, 単数形をとり, かつ定冠詞または不定冠詞づきで用いられ, かつ義務を表わす。

彼女は, “義務”の同語反復文の例として, (20), (21), (22)などを挙げている。

(20) The law is the law.

(21) A deal is a deal.

(22) A promise is a promise.

彼女によれば、この下位構文にあてはまる同語反復文は、たとえ実行したくなくとも実行しなければならないというニュアンスで解釈されるという。たとえば、(20) は、「たとえそうしたくなくとも法律は守らなければならない」とでも表現できるような意味で受けとられるとしている。

さて、こうした“下位構文”なる知識を仮定することによって、英語同語反復文の意味解釈はよりよく説明されるようになるのであろうか？

第2節で、文脈から分離されて与えられた場合であっても、ある種の同語反復文は他よりも容認しやすい〔文例(5)と(6)を見てほしい〕ことのあることを指摘した。Wierzbicka (1987) は、この点に関し直接的には何も触れていないが、彼女の見解に基づいてこうした事実を説明するとすれば、下位構文によくあてはまる同語反復文ほど他よりも解釈しやすい、ということになるであろう。このことは、間接的ながら、たとえば、彼女の次のような指摘に示されていると言えるかもしれない。

(23) a. War is war.

b. A war is a war.

(24) a. A promise is a promise.

b. Promises are promises.

Wierzbickaによれば、(23 a) [(10), (13) に同じ] は、“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の同語反復文のみに非常によくあてはまり、たとえば「しょせん戦争は悲惨なもので、そういうものとして戦争を受け入れなければならない」というような意味に容易に解釈されるという。これに対し、(23 b) は、何らかの下位構文に適合するとすれば、“義務”の同語反復文に該当することになり、たとえば「人は戦争に関わる何らかの義務を果たさねばならない」というような解釈を与えられることになる、という。逆に、(24 a)

[(22) に同じ] は、もっぱら“義務”の同語反復文としてきわめて認知されやすく、たとえば「約束は守りたくなくとも守らなければならない」というような意味に解釈されるのに対し、(24 b) は、結果的に、(どのような下位構文にあてはまることになるのか彼女は明言していない³⁾が、)「約束は約束にすぎない。約束が常にあてになるとは限らない」といった解釈がなされるとしている。

ところで、英語を母語としない者にとっては“人間の性質に対する寛容”の下位構文の条件に適合しているように見え、それゆえそれに対応する意味をもつものとして解釈できると考えざるえない同語反復文であるにもかかわらず、その下位構文にあてはまる意味をもつものとして解釈できない同語反復文があることを Wierzbicka 自ら認めている。(25) や (26) の文例がそうである。

(25) ? Nazis are Nazis.

(26) ? Rapists are rapists.

彼女によれば、「Nazi」や「rapist」のような名詞によって指示される対象はあまりに悪すぎるので、人がそれらに寛容さを求める可能性がほとんどなく、そのために (25), (26) のような同語反復文はきわめて解釈しにくい、という。このことは、「Nazi」や「rapist」といった名詞が、“人間の性質に対する寛容”にあてはまる反復語のカテゴリーに属していないことを意味している、と言えるのかもしれない。もしそうだとするならば、そして Wierzbicka の説明がより詳細かつ妥当なものとなることを望むならば、“人間の性質に対する寛容”の反復語に対する条件の中に、たとえば、人間の性質の「悪さ」の程度を条件の中に盛り込むなどして、「Nazi」, 「rapist」などが明確に除外されるようにする必要があるであろう。

また、Wierzbicka は、ある種の同語反復文は

3) Wierzbicka (1987) は、論文中的“下位構文”の説明以外の箇所、多くの英語同語反復文の例を挙げておきながら、その一部については解釈のみを与えどのような下位構文に該当するのかにまったく言及していない。おそらく、そうした同語反復文は、脚注2)で触れたように、論文中に記されなかった下位構文に属するのではないかと推測される。

複数の下位構文にあてはまる場合があり、その結果、多義性が生じる可能性があるとしている。そして、そうした場合、一般に聴者は、同語反復文の置かれた文脈や状況に関する知識を参照しながら妥当な解釈を下す、としている。こうした例として、彼女は、(27) を挙げる。

(27) A mother is a mother.

彼女によれば、この同語反復文(27)は、文脈・状況によって「母親には母親としての義務がある」というような意味に解釈されたり、「(どんなに他の母親と違うように見えても)母親は絶えず母親たる仕方振舞う」とでもいうように解釈されたりするという。

3.1.3 Fraser (1988) の研究 以上のような Wierzbicka (1987) の考えに異論を唱える研究者もいる。Fraser (1988) は、“下位構文”なる言語知識を人が有しているという仮定が妥当でないことを、いくつかの反例を挙げて説明している。

(28) The law is the law.

(29) Negotiations are negotiations.

(30) A deal is a deal.

(31) Love is love.

たとえば、文(28) [(20)に同じ]、(29)、(30) [(21)に同じ]は、いずれも“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の下位構文に対する要件のうち統語的な要件、すなわち反復語が無冠詞で使われかつ単数形であることを満足しないにもかかわらず、その下位構文にあてはまる意味をもつものとして解釈できる⁴⁾。

また、逆に、例文(31)は、“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の下位構文の統語的要件および(反復語に対する)意味的要件の両方を満たしているながら、その下位構文を適用できずその下位構文から導かれる意味をもつものとして解釈

できない、などである。

Fraser は、同語反復文が適格 (well-formed) となるか否かが、Wierzbicka の言うような冠詞の有無と種類、反復語の単数・複数の違い、および反復語の意味的性質によって決定されるのではなく、むしろ同語反復文をとりまく文脈・状況が何らかの解釈にうまく導きうるかどうかで決まる、という考えを述べている。この点では、彼の考えは、先に紹介した Levinson (1983) と似ている。

たとえば、彼によれば、(32) のような同語反復文は、文脈から離されて与えられるときわめて解釈しにくいものの、「風がたこを飛ばすのに都合の悪い方向から吹いてきていることに不満を言う人に向かって発話された」とすれば、それを意味ある同語反復文として受けとれるようになる、という。

(32) Wind is wind.

ただし、Fraser は、Levinson (1983) とは異なり、同語反復文の意味が文脈・状況のみによって決まるとは考えていない。彼は、Wierzbicka (1987) の主張する“意味的不変体”よりずっと一般的で漠然としてはいるが、すべての同語反復文に対し無条件に適用される慣習的な言語知識があると主張する。彼によれば、そうした言語知識は、下記の [A], [B], [C] のようなものであるという。彼は、そうした知識を会話参加者間で共有される一種の信念と捉えている。

[A] 反復語によって指示されるあらゆる対象に対し、話者は何らかの見解を主張している。

[B] 聴者がこの特定の (particular) 見解に気づくことができると話者は信じている。

[C] この見解は会話に関係している。

つまり、Fraser は、すべての同語反復文に共通する意味が、[A], [B], [C] のようなものに過ぎず、実際に聴者が受けとっている同語反復文の意味の多くは、文脈・状況に照らし引き出されたものである、と考えている。この考えを支持する

4) 例文(28), (30)は、Wierzbicka (1987) 自身によっては“義務”の同語反復文に適合する例として挙げられている。

例として、彼は、同一の同語反復文であっても文脈・状況が変わると異なって解釈されることがある、ことを挙げる。たとえば、文(33)〔(2), (14)と同じ〕は、文脈・状況次第で、「あらゆるビジネスは同じである」という意味や「ビジネスは無慈悲である」という意味、さらには「ビジネスはお金になる」というような意味に解釈されるというわけである。

(33) Business is business.

彼の仮定する同語反復文に関する言語知識[A], [B], [C]のうち、[A]は、反復語ばかりではなく主語一般に適用される言語知識と見なしても差し支えないかもしれない。また、[B], [C]にしても、同語反復文のみに対する言語知識というよりは、あらゆる種類の発話・言語表現に適用される一般的な言語知識と考える方がよいかもしれない。同語反復文に適用される何らかの慣習化された言語知識があるとすれば、同語反復文のみに特定のあてはまるそれを指摘してもらいたいところではある。

3.1.4 Gibbs and McCarrell (1990) の研究

Gibbs and McCarrell (1990) は、ここまで紹介してきた諸研究の考え方をいろいろと取り込みながら、多角的に同語反復文の意味解釈を説明しようと試みている。彼らは、基本的には、聴者が同語反復文をクラス包含関係を表わす文として受けとると考える。また、彼らは、先に述べた Wierzbicka (1987) の見解の一部を引用し、反復語の単数・複数の違いにより同語反復文の解釈が異なるとも仮定する。彼らによれば、複数形の同語反復文の場合、主語の指示する特定の事例群が述語の指示するカテゴリーの“ステレオタイプ”的事例群である、と解釈されやすいという。その理由は、複数形の反復語の方が集合概念を指示していると解釈されやすく、その分ステレオタイプが引き出されやすいため、としている。(34 a) [(8), (19)と同じ]と(34 b)を見てほしい。

(34) a. Boys will be boys.
b. A boy is a boy.

Gibbs と McCarrell は、たとえば「少年は手に

負えないもので、言う通りにさせるのは難しい」という意味を伝えるためには、表現(34 a)が用いられなければならない、(34 b)では、そもそもその意味が分かりにくいとしている。

彼らの考えに従えば、(35) [(16)と同じ]の文が(34 a)のように慣習的ではないのにもかかわらず、英語を母語とする聴者にとって、解釈しやすいことを説明できる。すなわち、複数形をもつ(35)は、(34 b)よりも「boy」のステレオタイプを引き出しやすく、したがって、文全体の解釈もしやすい、ということになるわけである。

(35) Boys are boys.

また、彼らは、単数形の同語反復文は、その反復語がステレオタイプを想起させやすい場合には、複数形の同語反復文と同様に解釈され、そうでない場合には「ある概念のどのような事例も他の事例と同等である」とでもいうような意味をもつものとして解釈される、としている。

Gibbs と McCarrell は、反復語がその概念の“ステレオタイプ”を想起させやすいかどうかで、その同語反復文の解釈のしやすさが変わるという点を強調している。たとえば、彼らは(36 a) [(8), (19), (34 a)と同じ]が(36 b)に比べ解釈しやすいと指摘する。

(36) a. Boys will be boys.
b. Girls will be girls.

その理由として、彼らは、アメリカ社会では「boy」に対して一般的にあてはまるステレオタイプの知識を話者・聴者が共有しているのに対し、「girl」に対してはこのようなステレオタイプの知識を共有していないという事実を挙げている。

以上の意味に加え、Gibbs and McCarrell (1990) は、同語反復文が Fraser (1988) の指摘するあらゆる同語反復文にあてはまる一般的な話者の信念、および文脈・状況に基づいて個別的に推論される具体的な話者の信念をも聴者に伝える、としている。

3.1.5 英語同語反復文の意味解釈の文脈独立性

ここで、これまでに述べてきた英語同語反復文の意味解釈に関する諸研究の議論を、同語反復文の

意味解釈の文脈独立性, すなわち聴者が同語反復文をどの程度特定の文脈・状況と関係なく解釈するのかという観点から整理してみよう。

すでに述べたように, Levinson (1983) は最も文脈依存的な立場に立つ。彼の考えでは, 文脈・状況に置かれなければ同語反復文は解釈できないことになる。逆に, Wierzbicka (1987) は最も文脈独立的な見解を採る。彼女は, ある種の(単語の意味とは異なる)言語知識を特定の文脈・状況とは関わりなく同語反復文に適用できると主張する。したがって, その意味解釈は基本的に文脈独立に行われることになる。Fraser (1988) は, 母語話者の間で共有されている漠然とした信念を文脈・状況とは無関係に同語反復文に適用できるが, その結果得られる意味は実際の同語反復文の意味の一部分にすぎず, 残りの意味の大部分を文脈・状況に照らし決定する, とする。したがって, 彼の考えでは, 同語反復文の意味解釈は, いくらかは文脈独立に定まるものの, ほとんど文脈依存的に決定されることになる。Gibbs and McCarrell (1990) は, 上の三者の考えを折衷した案を主張する。折衷の結果として, 彼らの説明では, 同語反復文の意味解釈は, Wierzbicka ほどには文脈独立に定まらないが, Fraser ほど文脈依存的でもなくなっている。

Wierzbicka (1987) や Gibbs and McCarrell (1990) のように, 反復語の単数・複数の違いや冠詞の有無によって意味解釈の仕方が異なるとする説明は, 英語のような, 冠詞を有し名詞の単数・複数の区別を表現上で明確に行う言語にはよくあてはまるかもしれない。しかし, そうした説明は, 言語特異的 (language-specific) な制約を前提とした説明であり, 他の言語の同語反復文の意味解釈にそのまま適用できるとは限らない。そのような言語特異的な制約が英語同語反復文の意味解釈に働くとするれば, 冠詞が担う情報や, 名詞が指示するものごとの数量を明確に表現しない日本語のような言語では, いったいどのような制約の下で個々の同語反復文の意味解釈が遂行されていることになるのであろうか。またさらに, 文脈独立性という点で, 日本語同語反復文の意味解釈は英語同語反復文の意味解釈と異なるであろうか。次節では, こうした点を中心に, 日本語の同語反復文の意味解釈に関する従来の研究を概観す

る。

3.2 日本語の同語反復文の意味解釈に関する従来の研究

日本語の同語反復文がどのように解釈されるかという議論は, もっぱら言語学において行われてきた (たとえば, 小泉, 1990; 国広, 1985; Miki, 1996; 毛利, 1980; Okamoto, 1993; 大野, 1978; 安井, 1978 など)。ただし, そこでの議論は, 同語反復文を他の種類の同語反復表現 (たとえば, 同一の名詞⁵⁾, 動詞, 形容詞, 形容動詞を繰り返す表現) と一緒に扱っていたり, 名詞述語文一般の議論の中で言及したりしていることが多く, 同語反復文そのものを詳しく考察しているものは少ない。

そうした状況にあって, Okamoto (1993) は, 同語反復文の意味解釈を比較的詳しく考察している。彼女は, 名詞を反復する他の同語反復表現の意味解釈と比較しながら同語反復文の意味解釈を論じている。Okamoto は, 同語反復文とそれらの同語反復表現とが, 名詞を繰り返すという点では同じであるが, 基本的に異なる意味をもつものとして解釈されると主張する。彼女によれば, 聴者は, 同語反復文を, “カテゴリーの不変性 (category immutability)” を強調するものとして受けとるか, “自主性 (autonomy)” または “不連続性 (discreteness)” を強調するものとして解釈するかのいずれかになる, という。

Okamoto の言うカテゴリーの不変性とは, 反復語 A の指示するカテゴリーの事例と認められるものが A に属するという事実はどうのような状況でも変わらないから, 受け入れなければならない, というようなことを指す。カテゴリーの不変性を強調するものとして受けとられる同語反復文

5) 英語には妥当な例が見つからないが, 日本語には名詞を反復する以下のような同語反復表現もある。A はいずれも名詞である。

- (i) a. A が A だけに, (文)
- b. 問題が問題だけに, どう対処したら良いか分からない。
- (ii) a. A は A で, (文)
- b. 太郎は太郎で, 別の考えもあろう。
- (iii) a. A も A だ。
- b. (そんなひどい言い方をするなんて,) 太郎も太郎だ。

の例として、彼女は文例 (37) を挙げる⁶⁾。

(37) 何歳でも、どんな職業でも、恋は恋。

Okamoto によれば、(37) の「恋は恋」は、恋の特定の事例がいかに周辺のなものであったにせよ、恋のカテゴリーに属するという事実を変えることはできないから、その事例を恋の事例として受け入れなければならない、というような意味をもつものとして受けとられるという。また、彼女の言う「自主性・不連続性」とは、反復語 A の指示する項目が、話者の談話世界 (discourse world)⁷⁾ の中で (明示的にまたは暗示的に) マークされているその項目と対照をなす別の項目と明確に異なっている、というようなことを指す。

彼女は、自主性・不連続性を強調する意味に受けとられる場合には、すでにカテゴリーの不変性を強調する意味でも受けとられていなければならない、とする。

(38) 男は男、女は女、理解しあえることはない。

たとえば、Okamoto によれば、文例 (38) は、「自主性・不連続性」を強調するものとして、この場合には、女のカテゴリーが男のそれとは明確に異なるカテゴリーであることを強調するものとして解釈されるが、そうした意味は、「カテゴリーの不変性」、ここでは、女と男それぞれのカテゴリーの不変性を強調する意味で理解された上で初めて受けとることが可能になる、という。しかしながら、どのような場合に、カテゴリーの不変性だけでなく、自主性・不連続性をも強調するものとして理解されるようになるのかについては彼女は明確に説明していない。

第 2 節で述べたように、たとえ同一の同語反復文であっても、特定の文脈に置かれた場合、あるいは、何らかの文脈から切り離されて提示された

場合の違いによって、異なる意味をもつものとして解釈されることがある。同語反復文の意味解釈を十全に説明するためには、なぜ同一の同語反復文を異なる意味をもつものとして解釈できるのか、そして個々の場合によってその意味がどのように変わるのかを具体的に説明しなければならない。Okamoto はこうした点に触れていない。さらに言えば、やはり第 2 節で触れたことであるが、同語反復文の意味の受けとり方は、反復語の種類あるいは意味的性質によっても変わる。この点についても Okamoto は言及していない。

3.3 佐山・阿部の研究

近年、我々 (阿部, 1989 a, 1989 b; 佐山・阿部, 1988 a, 1988 b, 1991 a, 1991 b, 1994) は、同語反復文の意味解釈の過程を体系的に説明しようと試みている。本稿では、日本語の同語反復文が解釈される際に働いているであろう“(処理の)原則”について、提案してみたいと思う。

ここで言う原則とは、日本語を母語とする聴者が同語反復文を解釈する際に適用する一種の“知識”あるいは“規則”を意味するものであり、それはまた、聴者が同語反復文を解釈する際に適用するスキーマの諸性質と言いかえてもよいかもしれない。

以下に、その“原則”を列挙していく。

“価値評価の不変”の原則：

反復語の指示する概念が強い“価値評価”を伴う場合、同語反復文を、その概念の価値評価が恒常的で不変であることを強調・再認識する意味に解釈する(ことを試みる)。

この原則を適用することで解釈されうる同語反復文の例としては、(39) や (40) などが挙げられるであろう。

(39) バカはバカだ。

(40) ダイヤはダイヤである。

一般的に言って、「バカ」や「ダイヤ」という概念には、肯定的にせよ否定的にせよ、強い価値評

6) Okamoto (1993) の中では、文例はすべてローマ字で表記されている。

7) 一般に、話者は、特定の文脈あるいはその場の状況の下において自らの心内に談話世界を想定し、その中の少なくとも一つと矛盾しない発話を行う (Abe, 1982; Fauconnier, 1985; Johnson-Laird, 1983)。

価が伴う。そのような、強い価値評価を伴う概念を指示する名詞を反復語とする同語反復文は、その意味するところを理解しやすく、また実際よく発話される。日本語において慣用句として定着している(41)なども、元来は、この種の原則の下で解釈されたものと考えられる。

(41) (腐っても,) 鯛は鯛(だ)。

では、(42)や(43)の場合はどうであろうか？

(42) ? 空は空である。

(43) ? 鱒は鱒だ。

我々の文化においては、一般に、「空」や「鱒」に、「ダイヤ」や「バカ」や「鯛」ほどの強い(正あるいは負の)価値評価を与えてはいない。したがって、文脈から切り離された形で(42)や(43)の同語反復文を与えられた場合、聴者は、“価値評価の不変”の原則の下でその意味を解釈することはできず、また、後述するような他の原則を適用して解釈することもできないため、結局どのように解釈してよいか迷うことになる。

同様のことは、同語反復文(41)を他の言語に直訳した場合にも言えるかもしれない。もしもその文化が日本とは異なり、「鯛」を高い価値評価をもつ魚としていなかった場合、その直訳された文の意味はほとんど伝わらないことになるであろう。

“価値評価の不変”の原則で言う“価値評価”は、その概念から標準的にまた恒常的に連想されるもの(たとえば、ダイヤであれば金銭的価値)である必要はない。話者・聴者間の特別な談話世界の中で一時的に付与されたものであってもよい。同じ同語反復文でも、その同語反復文の置かれた文脈・状況次第で話者・聴者間で想定される談話世界が変わり、そこで了解される価値評価も変化することは十分にありうる。たとえば、(44 a)と(44 b)とを比べてみてほしい[(44 a)は(9 a)と、(44 b)は(9 b)と同じ]。

(44) a. いくら小さくても、ダイヤはダイヤだ。十分に価値がある。

b. いくら高価だといっても、ダイヤはダイヤだ。命にはかえられない。

聴者は、(44 a)の文脈下で想定される談話世界の中で、「ダイヤ」の金銭的価値が話題とされていることを了解し、「ダイヤはダイヤだ」を、そうしたダイヤの高い価値に言及したものとして解釈することであろう。これに対し、(44 b)の文脈下で想定される談話世界では、「ダイヤ」の“もの”であることが話題となっていることを了解し、「命」との比較においてダイヤの価値が低いことが確認・強調されている発話として解釈するはずである。

ところで、“価値評価”を有する概念は当然無数にありうる。数あるそうした概念の中には、たとえば「約束」や「法律」といった、“社会的な”価値評価を有するものも含まれる。以下の文例(45)、(46)を解釈してほしい。

(45) 法律は法律だ。

(46) 約束は約束だ。

「法律」や「約束」のような、社会的な価値評価を有する反復語は、単に価値評価を伴うだけでなく、そうした価値評価からさらに進んで正義感や道徳感、あるいは義務感、などといった観念を生じさせる。その結果、反復語の指示する概念内容を実際に履行したり遵守したりする必要がある、というようなニュアンスが、“価値評価の不変”の原則から導かれる基本的な意味に加えられることになる。文例(45)、(46)は、先に3.1で引用したWierzbicka(1987)が“義務”の下位構文にあてはまる例として挙げていた英語同語反復文を日本語に直訳したものに相当している。我々の考えに従うなら、“義務”の下位構文の生じさせるニュアンスは、“価値評価の不変”の原則が適用され、その結果もたらされた価値評価から派生的に生じたものということになる。つまり、(45)、(46)のような例は、“価値評価の不変”の原則の適用されるケースの特別な場合と見なせるわけである。

“独自性の不変”の原則：

反復語 A が指示する概念が強い“独自性”をもつ場合、あるいは / かつ、陰に陽に「B は B, A は A である。(A, B : 名詞)」という対比的な情報呈示をとる場合、同語反復文「A は A である」を、A の概念の独自性の不変を強調・再認識する意味に解釈する（ことを試みる）。

“独自性の不変”の原則の下で解釈されうる同語反復文の例としては、(47), (48) などが挙げられると思う。

(47) (アメリカはアメリカ,) 日本は日本である。

(48) (君は君,) 太郎は太郎だ。

“独自性”は、その概念が恒常的に有すると認知されるものである必要はない。対比的な表現がとられると、修飾節の同語反復文「B は B,」が文脈となって主節の同語反復文と対照させられ、主節の反復語 A の指示する概念の、修飾節の反復語 B の指示する概念に対する相違点を話題とする談話世界が想定される。その結果、聴者は、その相違点に基づいた独自性の不変を認めることになる。

(49) a. ?心理学は心理学だ。
b. 生理学は生理学, 心理学は心理学だ。

たとえば、文 (49 a) が文脈から切り離されて与えられた場合、一般には心理学という反復語に対し強い価値評価や独自性を感じることができにくいため、“価値評価の不変”や“独自性の不変”の原則を適用しにくく、このままではその発話の意図が推測しにくい。しかし、(49 b) のように、対比するに足る対象が具体的に示されると、その違いを話題とする談話世界を想定することができ、その意味が容易に解釈できるようになる。

ただし、そうした談話世界は、ただ単に二つの名詞 A, B を並べただけでは想定できない。そうした談話世界は、聴者が A と B との間に共通の意味的基盤を見つけやすいほど容易に想定できる。

すなわち、A と B とが同じカテゴリー・レベルにあり、共有する意味的属性が多ければ多いほど、その対比は理解されやすくなる。例文 (50) の a, b, c を比べてみてほしい。

(50) a. ?鳥は鳥, 心理学は心理学だ。
b. ?認知心理学は認知心理学, 心理学は心理学だ。
c. 生理学は生理学, 心理学は心理学だ。

以下に記す二つの原則は、日本語に特有なものと考えられる。

“所属性の不変”の原則：

「a だって (あるいは、a も、など)、A は A である」の文形式をとり、かつ、a が反復語 A の下位事例、とくに典型的でない事例を表わす概念である場合、その同語反復文を“a が実際には A の下位事例である”ことを強調・再認識する発話として解釈する（ことを試みる）。

“所属性の不変”の原則の下で解釈されうる同語反復文の例としては、(51) を挙げることができると思う。

(51) ペンギンだって、鳥は鳥だ。

一般に、語の指示するカテゴリー概念の境界は、その語の発せられた文脈や状況次第で変わりうる (Barsalou, 1983, 1985; Lakoff, 1973, 1987, 1990)。したがって、たとえば、みかん箱が机として機能しうることを述べた文脈の下では、みかん箱が (一時的に) 机のカテゴリーに含められるため、(52) のような同語反復文もたやすく容認されるようになる。

(52) みかん箱だって、机は机だ。

“所属性の不変”の原則によって言及される事例 a は、カテゴリー A の事例として受け入れられるものでなければならないが、“典型的 (typical, prototypical)” (たとえば、Rosch, 1973; Rosch & Mervis, 1975) なものであってはなら

ない。次の (53 a) [(51) に同じ] と (53 b) を比較してもらいたい。

- (53) a. ペンギンだって、鳥は鳥である。
b. ?すずめだって、鳥は鳥である。

(53 a) は容認しやすいが、(53 b) は容認しにくい。この両者の違いは、ペンギンの鳥としての典型性とすずめの鳥としての典型性の差に起因する。つまり、(53 a) のように a が A の典型的でない事例の場合は受け入れやすいが、(53 b) のように典型的な事例である場合は、それなりの文脈・状況がない限り、受け入れにくい表現となる。

“所属性の不変”の原則が同語反復文「(a だって,) A は A である」に適用されると、反復語 A は、文脈中の語 a の上位のレベルにあるカテゴリー概念を指示するものとして解釈される。これを、前述の“独自性の不変”の原則が「(B は B,) A は A である」に適用される場合と比べてみよう。後者の場合には、A は B と同じレベルにあるカテゴリー概念を指示するものとして解釈される。その結果、同一の同語反復文でありながら、どちらの原則が適用されるかによって反復語 A が異なるレベルのカテゴリー概念を指示する場合が生じる。たとえば、(54) の a を b と比較してみてほしい。

- (54) a. 人だって、動物は動物だ。[人もやはり動物である。]
b. 人は人、動物は動物だ。[人と動物は違う。]

(54 a) には、“所属性の不変”の原則が適用される。「動物」は人間の上位レベルのカテゴリーを指示しており、文全体としては、人間の“動物”としての成員性を強調・再認識するものとして解釈される、と考えられる。一方、(54 b) には、“独自性の不変”の原則が適用される。その際、「動物」は人間と同じレベルのカテゴリーを指示しており、人間と他の“動物”との相違点を強調・再認識するものとして解釈される、と言えるであろう。

“主観の不変”の原則：

反復語が、話者の主観的な心的状態を表し、かつ、形容動詞の語幹とみなしうる名詞である場合、その同語反復文を話者が話者の主観的な心的状態の不変を確認する発話として解釈する(ことを試みる)。

“主観の不変”の原則の下で解釈されうる同語反復文の例としては、(55), (56) などが挙げられると思う。「安堵」は、「安心」と似た意味をもっているが、形容動詞の語幹とはなりえないので、それを反復語とする同語反復文(57)は、一般的には、容認できない。

(55) 楽は楽だ。

(56) 安心は安心だ。

(57) ?安堵は安堵だ。

3.4 “原則”と意味解釈

一般に、聴者は同語反復文を解釈する際に様々な知識を利用する(阿部・桃内・金子・李, 1994; 佐山・阿部, 1990)。発話状況に関する知識、当該の同語反復文の発せられた文脈・状況に関する知識、反復語およびその指示する概念に関する知識、そして、上記の原則の中でも触れている、個々の同語反復文が埋め込まれる慣用的表現パターンに関する知識、等々である。そうした各種の知識を利用する上での条件を述べたものが、我々の言う“原則”の条件部分であるといってもよいであろう。いずれかの“原則”の条件にあてはまれば、同語反復文の意味処理は進むことになる。もしいずれにもあてはまらなければ、そしてその他の手がかりがなければ、その同語反復文の意味は結局は捉えられないことになる。

すでに述べたように、同語反復文の中には、その意味(あるいはその発話の意図)を解釈しやすいものもあるが、そうでないものもある。我々の考えに従えば、“原則”を適用できるあるいは適用しやすい同語反復文ほど理解しやすい同語反復文になる、ということになる。逆に言えば、ある種の同語反復文が他より解釈しやすい理由は、聴者がそれらの同語反復文に対しては(“原則”と

呼ばれる)ある種の知識を適用することができ、文字通りの意味を超えた意味を計算することができるから、ということになるわけである。

基本的には、同語反復文が伝える意味は、隠喩文と同様、主語および述語(いずれも名詞)がもつ何らかの属性情報ということができる。隠喩文「AはBである」(あるいは「(ART) A be (ART) B」)を解釈し受けとることのできる属性情報は、Bのもつ属性のうちのある特定部分に限定される、つまり、Bから自由に連想される属性よりも絞られたものとなる(Searle, 1979)。同様に、同語反復文を解釈し受けとることのできる属性の種類は、“原則”の条件部分によって限定される。同語反復文と隠喩文の伝える属性情報は、ともに、述語が本来もつ属性情報のうちのある特定部分に限定されるとしても、その両者の限定の程度には多少の違いがあると考えられる。隠喩文の場合には、同じ述語Bが使われたとしても、主語Aが異なると、Bから受けとりうる属性情報が異なってくる。他方、同語反復文の場合には、上で我々が指摘したような、“(正または負の)価値”、“独自性”、“所属性”といった特定の性質をもつ属性情報に固定される。その意味で、同語反復文の方が、隠喩文に比べて、伝えられる属性情報の限定の度合いがより大きくまた固定的であると考えられる。

さて、ここでもう一度我々の提案する“原則”の条件部分を見比べてみてほしい。それら条件の中には、“価値評価の不変”の原則における「概念Aが価値評価を伴うこと」、あるいは“独自性の不変”の原則における「Aが独自性をもつこと」のように、反復語Aの意味的な性質を指定するものと、“独自性の不変”の原則における「BはB、AはAである」や“所属性の不変”の原則における「aだって、AはAである」のように、特定の文形式をとることを要求するものがあるのが分かるであろう。では、反復語Aがある原則に指定された意味的な要件を備え、同時に、それとは別の原則によって要求される表現形式をとる場合、問題の同語反復文「AはAである」はどのように解釈されることになるのであろうか。(58)のaとbとcを比較してみたい。

(58) a. 宝石は宝石だ。

- b. お金はお金、宝石は宝石だ。女性にとって宝石はお金にかえがたい魅力をもっているようだ。
- c. イミテーションだって、宝石は宝石だ。

(58 a)は、文例(40)「ダイヤはダイヤだ(である)」と同じように、“価値評価の不変”の原則から導かれる意味をもつものとして解釈されると考えられる。一方、(58 b)は、(58 a)を“独自性の不変”の原則の求める文形式「BはB、AはAだ」の形にしたものであり、(58 b)の「宝石は宝石だ」は、(58 a)の意味と“独自性の不変”の原則によって導かれる意味の両方の意味をもつものとして重畳的・多義的に解釈しうるように思われる。同様に、(58 c)は、(58 a)を“所属性の不変”の要求する「aだって、AはAである」の文形式にしたものであり、(58 c)の「宝石は宝石だ」は、(58 a)の意味に“所属性の不変”の原則から引き出される意味の加わった意味をもつものとして受けとられる。

先に、“価値評価の不変”の原則の適用される同語反復文の中でとくに“社会的な”価値評価を導くものは、単に価値評価の不変性を強調・再認識するものとしてだけでなく、さらに進んでその反復語の指示する概念内容の履行・遵守のニュアンスをも有するものとして解釈されると述べた。文例(59 a)はこのケースに該当する例として挙げたものである。(59 a)のような例も“価値評価の不変”の原則が適用される、という点では同じであると考えられる。実際、前述の(58) a, b, cと同様の意味の多義性・重畳性が(59) a, b, cについても認められる。

- (59) a. 法律は法律だ。
- b. 慣習は慣習、法律は法律だ。公務員の君としては、どちらかといえば、法律に従ったほうがよい。
- c. 悪法でも、法(律)は法(律)だ。

(58 b), (58 c)が(58 a)に対し有していた原則の適用関係と同じ関係を、(59 b), (59 c)は(59 a)に対してもっている。すなわち、(59 b), (59 c)における「法(律)は法(律)だ」は、“価値評価の不変”の原則から引き出される意味に、それぞ

れ, “独自性の不変”, “所属性の不変” の原則から導かれる意味の加わったものとして受けとられる。さらに, 「法(律)」が正義感や道德感のような観念を生じさせる反復語であるため, (59) の a, b, c は, (58) の a, b, c には認められない履行・遵守の意味合いをもつ。

(58), (59) の文例は, 意味的な条件をもつ原則と表現形式上の条件を備えた原則は一つと同語反復文に同時に適用可能であり, それら二つの原則が適用されれば, 同語反復文は重畳的・多義的に解釈されるようになる, ということを示している。

ただし, “主観の不変” の原則が適用される場合に関しては, 他のどのような原則との間にも適用の重畳性・多義性を生じさせないように思われる。これは, おそらく, 人が常に個体(概念)と属性(概念)とを認識し分けており, 他の原則の適用が反復語 A を個体と認識していることを前提とするのに対し, “主観の不変” の原則の適用は A を属性と認識していることを前提としており, “主観の不変” の原則は始めから他の原則と同時に適用できないようになっているためであろう。たとえば, 例文(60)を見てほしい。

- (60) a. 不安は不安だ。
 b. 道徳性不安だって, 不安は不安だ。

一般に, (60 a) は “主観の不変” の原則のみの適用によって解釈されるのではないかと考えられる。また, (60 b) は “所属性の不変” の原則の下での解釈しかありえないのではないかと思う。

4. 日本語と英語の同語反復文の対照比較

本節では, 日本語と英語の同語反復文を比較し, 同語反復文の意味解釈の文脈独立性について考察してみたいと思う。さらに, そうした比較を通じて, 同語反復文の意味解釈における普遍性あるいは言語特異性について考察を進めてみることにする。

まず, 我々の言う “原則” の下で解釈されると考えられる代表的な日本語同語反復文を, それと対応する英語同語反復文と比較する。続いて, 英語同語反復文については, 前述の通り Wierzbicka (1987) が比較的多くの具体例を挙

げているので, 彼女の挙げる英語同語反復文の例を, それに対応する日本語同語反復文と比べてみる。

4.1 日本語から英語へ

- (61) ダイヤはダイヤである。

(61) は, 我々が原則 “価値評価の不変” の条件によく適合する例として挙げたものである〔例文(40)を参照されたい〕。この(61)の「ダイヤ」に対応する英語名詞「diamond」を反復語とする英語同語反復文の表現は, 冠詞の種類と有無, および単数・複数の違いを考慮すると(62)のように複数存在することになる。

- (62) a. A diamond is a diamond.
 b. Diamonds are diamonds.
 c. The diamond is the diamond.
 d. The diamonds are the diamonds.

身近にいる英文学を専門とする英語母語話者に, (62) の a から d までを見せ, 同語反復文として意味の伝わるものはどれかと尋ねたところ, 彼は(62 a) と(62 b) が同語反復文として意味が伝わるとした⁸⁾。そして, その意味としては, (62 a) が「ダイヤモンドにも, 他の宝石 (precious stones) と変わらない本質的な価値 (intrinsic value) がある」というようなものになり, 一方, (62 b) は「ダイヤモンドには社会的な価値 (social value) がある」といったものになるとした。この “社会的価値” とは何かとさらに質問したところ, それは金銭的価値のようなものだと答えた。

彼が(62 a) に与えた意味は, 先に述べた Wierzbicka (1987) の言う一番目の意味的不変体 (の意味) とよく似ている。しかし, (62 b) に与えた意味は, 従来の英語同語反復文の意味解

8) ただし, 彼の指摘によれば, 同語反復文としてでなければ, (62 c), (62 d) も次のような場合には意味をもつ発話となるという。すなわち, 話者がショーウィンドウに飾られたダイヤモンドを指さし, 話者と聴者の間の過去の会話の中で話題になっていたダイヤモンドとは, 今話者が指さしているダイヤモンドのことである, という意味で発話する場合である。

釈の説明の中には見い出せない。この意味は、ちょうど日本語母語話者が(61)から引き出すであろう意味、すなわち我々の言う“価値評価の不変”の原則から導き出される意味に相当している。したがって、彼の説明が英語母語話者一般の認識と同じであるなら、このことは、実際には、英語母語話者も、我々の提案する“価値評価の不変”の原則と類似した知識を心内に有しており、それを(62b)に適用して解釈を進めていることになる。

(63) 約束は約束である(だ)。

- (64) a. A promise is a promise.
 b. Promises are promises.
 c. The promise is the promise.
 d. The promises are the promises.

(63)は、“価値評価の不変”の原則の適用されるケースの特別な場合として示したものである。(61)の場合と同様、(63)(文例(46)と同じ)に対しても、(64)のaからdまでの4通りの英語の同語反復文が考えられる。これらのうち、英語母語話者によって容認されるのは(64a)および(64b)である(Wierzbicka, 1987)。ただし、Wierzbicka (1987)の言うところによれば、(64a)と(64b)とは意味が異なり、(64a)は「約束は守りたくなくても守らなければならない」のように解釈されるのに対し、(64b)は「約束は約束にすぎない。常にあてになるとは限らない」という別の意味をもつものとして解釈される、という。したがって、Wierzbickaの説明が妥当なら、(63)の意味は(64a)の意味と対応することになる。ただし、これは、(63)が特定の解釈に導く文脈・状況から分離されて与えられた場合である。文脈・状況次第では、(63)が(64b)の意味をもつものとして解釈されることもあるであろう。すなわち、(63)に“価値評価の不変”の原則が適用されることもありうる。このことは、“原則”の適用のされ方が同語反復文の置かれた文脈・状況に応じて柔軟に変化することを意味する。

(65) a. 太郎は太郎だ。

b. Taro is Taro.

(65a)は、“独自性の不変”の原則の適用される代表的な例として挙げたものである〔例文(48)を見てほしい〕。この(65a)の反復語は固有名詞「太郎」であり、対応する英語同語反復文は(65b)となる。この英語同語反復文(65b)の意味は、たとえば「太郎は(別の人間との比較において)ユニークな存在である」のように解釈され(Wierzbicka, 1987)、明らかにWierzbicka (1987)の言う二番目の意味的不変体(の意味)が強く引き出される例と言える。こうした観察からすると、我々の言う“独自性の不変”の原則から導かれるであろう意味は、Wierzbicka (1987)の言う二番目の意味的不変体ときわめて類似したものであると言えそうである。ただし、Wierzbickaの言うユニークさと我々の主張する独自性とは、ユニークさが必ずしも価値評価(肯定的にせよ否定的にせよ)を含むとは限らないように思われるのに対し、独自性は肯定的な価値評価を含むことがある、という点で違いがある。

我々の提案した残りの二つの原則“所属性の不変”の原則、および“主観の不変”の原則は、日本語に言語特異的な表現上の条件をもっており、それらの原則の下で解釈される日本語同語反復文に直接対応するような英語同語反復文は存在しない。

(66) ペンギンだって、鳥は鳥だ。

(67) 不安は不安だ。

実際、日本語を専門とする前とは別の英語母語話者に、“所属性の不変”の原則によくあてはまるとした文例(66)〔(51)、(53a)と同じ〕、および、“主観の不変”の原則の適例と考えられる文例(67)〔(60a)と同じ〕の意味を尋ねてみたが、彼は両方とも分からないと答えた。そこでさらに、日本語でそれら同語反復文の意味を説明したところ、それらの意味を英語同語反復文を用いて伝えることはできないと言いつつ添えた。

ただ、“所属性の不変”の原則から導かれる意味「aだって実際にはAである」と、Wierzbicka (1987)の言う一番目の意味的不変

体 (の意味)「すべての A は他の A と変わらない」は、ともに「A」の成員の“同一性の不変”を強調・再確認するという点で似ている。日本語の場合には、さらに一步進ませ、「A」の非典型的成員の (A の成員としての) “同一性の不変”を述べるために、特別な表現形式「a だって、A は A だ」を慣用表現として発達させたのであろう。

4. 1 における考察をまとめると次のようになる。我々が日本語母語話者が有していると仮定した“価値評価の不変”, “独自性の不変”の各原則と同様な知識を、英語母語話者も有している可能性がある。また, “所属性の不変”の原則にしても, 「すべての A は他の A と変わらない」という英語母語話者のもつ知識と, 「A」の成員の“同一性の不変”を強調・再確認するという共通点がある。

4. 2 英語から日本語へ

さて、今度は、逆に、Wierzbicka (1987) が、彼女の言う“下位構文”にあてはまる例として挙げている英語同語反復文を取りあげてみよう。そして、そのそれぞれに対応する日本語同語反復文と比較してみることにする。

- (68) a. War is war.
b. 戦争は戦争である(だ)。
- (69) a. Politics is politics.
b. 政治は政治である(だ)。
- (70) a. Business is business.
b. ビジネスはビジネスである(だ)。

英文 (68 a), (69 a), (70 a) は、Wierzbicka (1987) によって“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の下位構文に適合する例として挙げられていたものである。彼女は、それらの文の意味が、概略、以下のようにになると説明している。戦争 (政治, ビジネス) は人に悪いことをもたらすものであるが、そのことは言うまでもないことであり、また、そのことを変えることはできない。それゆえ、そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない。

これらの意味は、それぞれの英文に対応する日本語同語反復文 (68 b), (69 b), (70 b) から受けとることができる。(68 b), (69 b), (70 b) の例から推測すれば、Wierzbicka (1987) の説明は、英語に対してばかりではなく、日本語にもあてはまり、普遍性の高いものと言えそうである。しかし、日本語の場合には、その意味は彼女の言うほど固定的に決まっておらず、文脈や状況次第でその伝達される意味の側面が変化する。例文 (71) の 2 文を見てもらいたい。

- (71) a. 相手が親友だからと言っても、仕事は仕事だ。
私情をはさむわけにはいかない。
b. 客引きだって、仕事は仕事だ。

例文 (71) から分かるように、文脈次第で、「仕事」のどのような属性が強調されるかは変わりうる。つまり、Wierzbicka (1987) の主張する“radical semantics (すなわち、同語反復文の意味は文脈・状況などの言語外の知識には依存せず、言語内知識だけでほぼ定まるとする極端な主張)”は、少なくとも日本語の同語反復文についてはあてはまらないかもしれない。実は、同様のことは、Wierzbicka (1987) への批判として、英語についても指摘されている (Fraser, 1988; Gibbs & McCarrell, 1990)。たとえば、Gibbs and McCarrell (1990) は、「Business is business」[(2), (14), (33) と同じ] が、その置かれた文脈・状況の違いにより、「ビジネスは競争である」というようにビジネスが否定的属性を有するものとして解釈されることもあれば、「ビジネスは金銭的な利得を与えるものである」というように肯定的属性をもつものとして受けとられることもあると述べている。

- (72) a. Children are children.
b. 子供は子供である(だ)。
- (73) a. Boys are (will be) boys.
b. 男の子は男の子である(だ)。
c. 少年は少年である(だ)。
- (74) a. Women are women.

b. 女は女である(だ)。

英語同語反復文 (72 a), (73 a), (74 a) は、Wierzbicka (1987) が“人間の性質に対する寛容”の下位構文に適合する代表的な例として挙げているものである。彼女が説明しているそれらの意味は、概略、次のようなものである。子供(男の子 [少年], 女)は、まわりの人間がそうしてほしくないと思うことをしてしまうものであるが、そのことは言うまでもないことであり、また、子供(男の子 [少年], 女)はその行動を変えられないものである。それゆえ、そのことを理解しなくてはならないし、そのことで何らかの悪いことを自らに感じさせるべきではない。

このような意味は、確かに、対応する日本語同語反復文 (72 b) [(1) に同じ], (73 b), (73 c), (74 b) から受けとることができる。とくに、日本語の慣用句とも言える (74 b) の意味などは、まさにその通りであろう。しかし、やはり、この“人間の性質に対する寛容”の場合も、上記の“複雑な人間の行為に対するさめた態度”の場合と同様に、日本語同語反復文の意味は、Wierzbicka の言うほど固定的にはならない。また、“価値評価の不変”と強く関係し合っていると考えられる。(72 b), (73 b), (73 c), (74 b) など、それぞれの英文に対応する日本語同語反復文の場合には、その意味は、文脈次第で、Wierzbicka の言う“寛容”とは異なり、“賞賛”となったりもする。たとえば、(72 b) を (75) のようにしてみよう。

(75) やっぱり、子供は子供だね。

この表現 (75) は、子供の“しようがなさに対する寛容・諦観”を伝えるための発話としても容認できるし、また、子供の“可愛らしさ”を伝えるための発話としても受け入れることができるであろう。

(76) a. The law is the law.
b. 法律は法律である(だ)。

(77) a. A deal is a deal.
b. 取引は取引である(だ)。

(78) a. A promise is a promise.
b. 約束は約束である(だ)。

Wierzbicka (1987) は、“義務”の同語反復文として (76 a), (77 a), (78 a) を挙げ、その意味を概略次のようなものだとしている。法律(取引、約束)について実行すべきことがあるという事実を人は受け入れなければならない。ただし、ときどき実行したくないと思うことがあっても、そのことによって自らに何らかの悪いことを感じさせるべきではない。

英文 (76 a), (77 a), (78 a) に対応する日本語同語反復文 (76 b), (77 b), (78 b) [(46), (63) と同じ] は、いずれも日本語母語話者によって比較的容易に受け入れられるであろう。そして、その際受けとられる意味も、基本的には Wierzbicka が示唆する意味とほとんど同じではないかと思う。つまり、「法律」、「約束」などの概念から連想される“履行”や“遵守”といった意味合いが伝わる。

まとめると、結局、Wierzbicka (1987) の言う“複雑な人間の行為に対するさめた態度”、“人間の性質に対する寛容”などといった下位構文の知識は、いずれも、少なくとも日本語母語話者の有する知識としては特定化しすぎており、個々の文脈・状況によって同じ同語反復文が異なって解釈される事実を説明できないことになる。さらに言えば、同様のことは英語母語話者の有する知識にもあてはまるのではないかと思われる。

5. 同語反復文の意味の普遍性

前節とくに 4.1 における議論から、同語反復文は、英語や日本語といった個別言語の如何にかかわらず、次のような三つの意味を伝える表現として普遍的に用いられている可能性を指摘できるのではないかと思う。その第一は、カテゴリー A のもつ最も顕著で不変な特徴(あるいは属性)によってもたらされる意味、とくに、我々の言う“価値評価の不変”の意味、すなわち、特徴の有する正または負の価値である。“価値評価の不変”の意味は、Gibbs and McCarrell (1990) の言う“ステレオタイプ”に相当する。第二は、「A には他 (B) とは違う」という、他のカテゴリーか

らの“独自性の不変”の意味,そして,第三は,「すべてのAは他のAと変わらない」という,カテゴリーの成員間の“同一性の不変”の意味である。

3.3の“原則”の説明の箇所でも触れたように,表現形式という点から見れば,同語反復文は,主語,述語の異なる名詞述語文「AはBである」の特別な場合にあたる。一般に,名詞述語文は,クラス包含関係かまたは同一関係を示すものとして解釈される。すなわち,主語Aの指示するカテゴリー概念が述語Bの指示するカテゴリー概念の成員であると解釈されるか,あるいは主語Aのカテゴリーと述語Bのカテゴリーとが同一対象を指示していると解釈される。それゆえ,名詞述語文の特別な場合である同語反復文も,クラス包含関係かまたは同一関係を表すものとして解釈されると考えるのは自然であろう。第3節で触れた通り,Gibbs and McCarrell (1990)は,まさに一般の名詞述語文と同じクラス包含関係を示すものとして同語反復文が解釈されると主張する。

しかし,もちろん,反復語Aしかもたない同語反復文は,A,B,二つのカテゴリー概念の間の“関係”を伝えることはできない。同語反復文は,必然的に,反復語Aによって指示されるカテゴリー概念Aそれ自体がもつ何らかの情報を伝える以外にはその役割はないことになる。そうした情報になりうるのが,上述した三つの意味と言えるのではないかと思う。

よく知られている通り,自然カテゴリー概念は,“族類似 (family resemblance)”構造を有しており,当該カテゴリーを定義づけ,それゆえそのすべての成員が有する“定義的特徴 (defining feature)”なるものが存在するわけではない (Rosch, 1973; Rosch & Mervis, 1975)。つまり,自然カテゴリーは,明確な定義的特徴をもたずその境界が曖昧である。また,自然カテゴリー概念は,その使われ方が時とともに変わることもよくある。つまり,それを構成する重要な特徴が徐々に変化したり,その境界が変わったりもする。それがために,時として,言語使用者には,あるカテゴリーの周辺の成員が当該カテゴリーの成員であること,すなわち,ある成員のAとしての“同一性の不変”,を強調・再認識する必要が生じてくることにもなる。日本語ではそれを (79)

[(51), (53 a) に同じ] のような同語反復文を用いて伝えるのではないかと思う。

(79) ペンギンだって,鳥は鳥だ。

また,ある場合には,自然カテゴリー概念の境界や成員がはっきりとしないために,そのカテゴリーに近接し,重なり合っている他のカテゴリーと違うこと,すなわち,そのカテゴリーの“独自性の不変”,を強調・再認識することが必要にもなってくる。そのために,(80) のような同語反復文が存在することにもなる。

(80) 心理言語学は心理言語学,言語心理学は言語心理学だ。同じように見えて,それらはその成り立ちからして違う。

さらに,他のカテゴリーとは異なるという意味の“独自性の不変”を伝えるにとどまらず,そのカテゴリーの独自性を支える顕著な特徴(あるいは属性)を強調・再認識させるために同語反復文が用いられる。たとえば,(81) [(1), (72 b) に同じ], (82) [(2), (14), (33) と同じ], (83) [(7), (41) に同じ], (84) [(6 a), (62 a) と同じ] のような例である。

(81) (しょせん,) 子供は子供だ。

(82) Business is business.

(83) (腐っても,) 鯛は鯛(だ)。

(84) A diamond is a diamond.

あるカテゴリー概念の特徴(あるいはそれがもつ顕著な属性)を強く効果的に伝える道具だとして,同語反復文は,日本語においても,英語においても,そしておそらくはそれ以外の言語においても,用いられている。そして,その際,その特徴を伝える話者の価値評価は,どちらかと言えば,肯定的というよりも,否定的な場合が多い (佐山・阿部, 1994)。それは,我々が指摘する日本語の場合ばかりではなく,英語やアラビア語の場合にもあてはまるようである (英語の場合につ

いて、Gibbs and McCarrell (1990)；アラビア語の場合について、Farghal (1992)。

本稿では、日本語、英語それぞれの同語反復文の意味解釈のあり方を、それらの比較をまじえながら考察してきた。双方の意味解釈に対する研究者間の立場の相違は、根本的には、解釈時に必要とされる知識のうちどの程度を言語知識の範囲内から引き出し、どの程度を文脈・状況知識から引き出すと考えるかにある。本研究は、英語および日本語同語反復文の意味解釈に関する従来の研究の中に、反復語の語彙情報や統語情報のみを言語知識から引き出し、それ以外は文脈・状況知識から引き出して解釈すると考える立場 (Glucksberg & Keysar, 1990；毛利, 1980 など) から、言語知識を参照すれば同語反復文はほぼ解釈できるとする立場 (Wierzbicka, 1987) まで、さまざまな見解が存在することを示した。また、英語および日本語の同語反復文について、それぞれの母語話者のもつどのような知識が、双方の意味解釈を支えているのかについて考察した。認知心理学者としての我々の関心は、同語反復文の意味解釈の際に必要なとされる知識源や知識を同定したり詳述したりすることにとどまるわけではもちろんない。我々の興味は、人が同語反復文を解釈する、そのメカニズムの具体的な解明にある。これを成し遂げるためには、なお一層の理論的考察とそこから生じてきた仮説の実験的吟味という、長い研究の連鎖が必要となるであろう。ともあれ、同語反復文の研究には、この表現形式が、“文字通りの意味”を超えた意味の理解を要求する発話の中でも、最も単純なものの一つと言えるだけに、修辞理解過程の解明というより大きな問題への突破口を開く糸口となることが期待されているわけである。

文 献

- Abe, J. (1982). Schema representation of the "speaker-world" in natural language processing. In R. Trappl (Ed.), *Cybernetics and systems research* (pp. 885-890). Amsterdam: North-Holland.
- 阿部純一 (1989a) “心理学は科学だ”, “心理学はうなぎだ”, “心理学は心理学だ”: 修辞理解過程についての認知心理学的考察 日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, L23.
- 阿部純一 (1989b) 修辞を理解する過程 ディスコースプロセス研究, 1, 85-92.
- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李 光五 (1994) 人間の言語情報処理: 言語理解の認知科学 サイエンス社.
- Barsalou, L. (1983). Ad hoc categories. *Memory & Cognition*, 11, 211-227.
- Barsalou, L. (1985). Ideals, central tendency, and frequency of instantiation as determinants of graded structure in categories. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 11, 629-654.
- Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction* (pp. 56-310). Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H., & Gerrig, R. J. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113, 121-126.
- Farghal, M. (1992). Colloquial Jordanian Arabic tautologies. *Journal of Pragmatics*, 17, 223-240.
- Fauconnier, G. (1985). *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*. Cambridge, MA: MIT Press. 坂原 茂・水光雅則・田窪行則・三藤 博(訳) (1987) メンタル・スペース: 自然言語理解の認知インターフェイス 白水社.
- Fraser, B. (1988). Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies. *Journal of Pragmatics*, 12, 215-220.
- Gibbs, R. W. (1982). A critical examination of the contribution of literal meaning to understanding nonliteral discourse. *Text*, 2, 9-27.
- Gibbs, R. W. (1983). Do people always process the literal meanings of indirect requests? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 9, 524-533.
- Gibbs, R. W. (1984). Literal meaning and psychological theory. *Cognitive Science*, 8, 275-304.
- Gibbs, R. W. (1986). What makes some indirect speech acts conventional? *Journal of Memory and Language*, 25, 181-196.
- Gibbs, R. W., & McCarrell, N. S. (1990). Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding colloquial tautologies. *Journal of Psycholinguistic Research*, 19, 125-145.
- Gildea, P., & Glucksberg, S. (1983). On understanding metaphor: The role of context. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 22, 577-590.

- Glucksberg, S., & Keysar, B. (1990). Understanding metaphorical comparisons: Beyond similarity. *Psychological Review*, 97, 3-18.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics: Vol. 3. Speech acts* (pp. 41-58). New York: Academic Press.
- Grice, H. P. (1978). Some further notes on logic and conversation. In P. Cole, & J. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics: Vol. 9. Pragmatics* (pp. 113-128). New York: Academic Press.
- Johnson-Laird, P. N. (1983). *Mental models*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 海保博之(監修) AIUEO(訳) (1988) メンタル・モデル: 言語・推論・意識の認知科学 産業図書.
- Jorgensen, J., Miller, G. A., & Sperber, D. (1984). Test of the mention theory of Irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 113, 112-120.
- 小泉 保 (1990) 言外の言語学: 日本語語用論 三省堂.
- Kreuz, R. J., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 118, 374-386.
- 国広哲弥 (1985) 慣用句論 日本語学, 4, 4-14.
- Lakoff, G. (1973). Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. *Journal of Philosophical Logic*, 2, 458-508.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categorization reveals about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1990). The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas? *Cognitive Linguistics*, 1, 39-74.
- Levinson, S. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. 安井 稔・奥田夏子(訳) (1990) 英語語用論: Pragmatics 研究社出版.
- Miki, E. (1996). Evocation and tautologies. *Journal of Pragmatics*, 25, 635-648.
- 毛利可信 (1980) 英語の語用論 大修館書店.
- Okamoto, S. (1993). Nominal repetitive constructions in Japanese: The 'tautology' controversy revisited. *Journal of Pragmatics*, 20, 433-466.
- 大野 晋 (1978) 日本語の文法を考える 岩波書店.
- Ortony, A. (1979). Beyond literal similarity. *Psychological Review*, 86, 161-180.
- Ortony, A., Schallert, D. L., Reynolds, R. E., & Antos, S. J. (1978). Interpreting metaphors and idioms: Some effects of context on comprehension. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 17, 465-477.
- Rosch, E. (1973). On the internal structure of perceptual and semantic categories. In T. E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language* (pp. 111-144). New York: Academic Press.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Study of categories. *Cognitive Psychology*, 7, 573-605.
- 佐山公一・阿部純一 (1988a) 修辞理解の認知過程: 同語反復文の場合(隠喩文との比較) 日本認知科学会第5回大会発表論文集, 72-73.
- 佐山公一・阿部純一 (1988b) 同語反復文の理解過程 日本心理学会第52回大会発表論文集, 783.
- 佐山公一・阿部純一 (1990) 日本語名詞述語文の意味解釈手続きについて 情報処理学会自然言語研究会報告, (自然言語処理) 78-9, 65-72.
- 佐山公一・阿部純一 (1991a) 同語反復文と隠喩文の意味解釈過程を支える概念知識構造の提案: 典型性と顕著性の概念ネットワーク上での表現 日本認知科学会第8回大会発表論文集, 72-73.
- 佐山公一・阿部純一 (1991b) 日本語名詞述語文の意味解釈過程のモデル化(Ⅲ): "典型性" の概念ネットワーク上での表現 日本心理学会第55回大会発表論文集, 380.
- 佐山公一・阿部純一 (1994) 日本語同語反復文の意味解釈: 反復語および文脈の関わり 心理学研究, 65, 25-33.
- Searle, J. (1979). Metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (pp. 92-123). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. (1984). Verbal irony: Pretense or echoic mention? *Journal of Experimental Psychology: General*, 113, 130-136.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Ward, G. L., & Hirschberg, J. (1991). A pragmatic analysis of tautological utterances. *Journal of Pragmatics*, 15, 507-520.
- Wierzbicka, A. (1987). Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics.' *Language*, 63, 95-114.
- Wierzbicka, A. (1988). Boys will be boys: A rejoinder to Bruce Fraser. *Journal of Pragmatics*, 12, 221-224.
- 山梨正明 (1986) 発話行為 大修館書店.
- 安井 稔 (1978) 言外の意味 研究社出版.

— 1994. 4. 25 受稿, 1998. 9. 3 受理 —